里見八犬傳　第十輯　巻之四

へ13
709
34

遠 13
帙 709
巻 34

明治三六年
十月九日
購求

南總里見八犬傳第七輯巻之四

東都　曲亭主人編次

第六十八回

穴山の枯野ゐ村長秋實を救ふ
猿石の旅宿ゐ濱路濱路を誘ふ

奈末與美の甲斐州ハ州の四境皆山えよりく甲斐と名づけ〻り甲斐ハ峽〻〻峽ハ間〻人食山の峽ゐ住りよりてこれを甲斐とふ抑富野穴山の両郷ハ西ゐ白峯鳳凰山　又法王山　地藏嶽藥師嶽あり西北ゐ駒嶽八嶽あり北ゐ金峰山あり白峰ハ古歌ゐ甲斐ゞ峰と詠るめ是えこの他身延山七面山夢山狄山櫻尾岳塩山神座山中山篠子天目山あり蕃山禿山ゐ至りてゐ傳るゐ遥かゐ〻ぎ〻されゞ當時の國守武田家の城ハ八代郡躑躅崎ゐ在りもれを古府と呼做せ〻ハ中府新府のいで来〻より後世の稱呼え就中富野穴山ハ西と南北の二方

つぢが崎の城井ゐ石和の古城のうハ第五の巻ゐつぶさゐいへり

鶴見清一藏

又ふ山のそく又その山脚ゐ富士川ゆり迺川の中流を河鹿川と呼做しゐ上を金無川
といふゆりかくまでも此日こゐ当時村落罕ゐそ樵夫猶戸ゆゑゆめく往還跡絶し麓
路ゑ数程ゐ犬塚信乃ハ富野宍山のほとりなる芒花ゆけゆく黄昏時背後より放ち
鳥銃ゐ左の腋を敷ゐ一かゞの幸ひゆゑ身ゐ中らず袖の縫処ゐ銃丸ハ抜けゝを仇を
間近く引よせんと必ずそゞ俱身を轉しゝ虚滅ゐく俟程ゐ且しゝ一箇の武士齢ハ
四十許なるべ眼圓ゐ色浅黒く暮髪頤ゐ満ゝ身長高きゞ狩猟衣束ゐ行縢しゝ
紫銅作りの両刀を跨へゐゐ携へゐる鳥銃ゐそ枯芒花を推分々々是方を投ゝ来る
後方より獲物の兎を引提ゐ一箇の奴隷従ひ来ゐ件の武士ハ既ゐをや信乃ゞ身
邊ゐ近つ兎と見ゆ忽地膽を潰しゝ什麼らゐとぞりゐ呆るゝ半晌ゐゐ
従者も亦ゐ駭きゝ叔ゆゝと口隱ゐる頭を掻つ先後ゐ人ゐや来ると眺ゐ項を
伸せ遠見ハ蘆間隱ゐの鷺鷥ゐ似ゝ俱ゐ心を苦しめけりかゝゐゞ言ゐゐ

ゞ言ハ件の武士ハ従者を見かへりゝ声を潜めゐらゐ居ゐる挾牡鹿ゐ寛違ハゐ
西銃丸撃ゐ留めゝうと思ひしゐ鹿ゐハゐ旅客を撃倒せしゐ徳ゞ言ゐの人
手のひとりゐ見ゐ甚麼ゐる星の出りてやかゝハ非命ゐ縛絶ゐ且ハ今ゐ言ゐ術
ゐ身ゐ両刀を帯ゐ言ハ御内人の親類ゐそゐゝ他御らり来ゐるゆ狩倘ゐ
らんゐハ刃ゐゐ人ゐのゐ兎と耳ゐけハ後者も亦信乃を洗ゝと見ゝ声を低ゐ現
宜ゐるゞゝ御内人の親屬ゐゝその方ゞゐの人知らゞ敵手ゞられゝゐゞ
かゝん折ゐゝ四下ゐ来ゐる人ゐ疾々かゝらきゐんかしといふ然ゐりと頷きて主従二名
足ゞゐゐ走きらんとしてけるを忽地ゐ又立留ゐゝ媼内ハ何ゐゐゐ彼旅客の両刀ハ
その刀ゐそ鋭ゐゐ鋭ゐゐ定ゐゐ知るゐゐけゞゞ表装ゐ金銀ゐゝ鞍も亦貴價
ゐり且身のゞゐの賤しかゝねゞ盤纏も腰ゐヨゐゐるべ世の常言を引ゐゐ祓ゞ毒を
啖ゐゞ血を舐ゐ人を殺ゞ血を見るべしといふをいゐゐぞや宝の山ゐハ入りゐらゐ手を

○渓泉堂蔵

空しく走り帰るとは人として毒なるも真の丈夫とは云へじ死人の要かき名刀を今取りぞして捨てゆるぞ後悔なかに立かへりて物せると見せば媼内荒介と うち笑ひ仰寝に至極せり然しば路銀は山分めぐ僕も賜はかとのせる果ぞ 頷きくいふやあ及ぶ疾せうとのそぐ立て主従は舊の所かへるの且先后を見 かへり媼内は既にや信乃が刀を手を被けく畧ゝんと走る腕を信乃は臥ぬく 楚と捉へて曳一曳く投蜚せば媼内は吐嗟と叫びく筋斗まる身を虚ざるに 三間ばかりゆるこる株に膳を撲悩さまく要時に起もるざりけり件の武士は二の 光景に駭くと大々こるぞ持こる鳥銃振内ゝく敷仆さと走り蒐るを 信乃は透さず足を飛しく亦脇頭を礫と蹴る蹴らまく苦と叫びもあず 鳥銃蔓哩と投捨く両三歩踏地に死の刀を拔んとする程に信乃は走るも 身を起しく送る鳥銃より揚る程もゆるせず件の武士は刀を見りと振揚く

真額臨く斫らんとするを信乃は騒ぐず鳥銃を受流し拂退く六七合 戰に程に媼内は多く身を起しく半鎚る中刀を拔敬めゆ背後ゆ 近つくを尻目にかる信乃は日比の本事と出しく鋭と宛電光の疾を走るに 異ゆるず既にく件の武士の刀を礫と打落を背後に内ゆく媼内ぞ刀に走く 身を反しく肩尖丁と打しぶ腐居に撞と平伏う透もあらせず件の武士は 組んと云るを組しも果ぞ又隅を礫と打ゆ拳の冴に要時に堪ぞ云とぞるに 仰反る主を資る媼内は起めぐんとする程に信乃は鳥銃より揚き又媼内を 打伏る本事に怯む件の武士も起んとしる背隅席蔕の塵埃を拂ふぞ 彼奔一打居らまく主従息も云くに免しと叫ぶに信乃は怒まる声高 汝は汝ホ人を識らぞして不良の心を起せしは睡まる虎の髯を曳く鼠に似る白 徒こるぞ身に恙なとゆ仇を寄せんとぞ倒臥せしを者ざるや汝ホは三

○補泉堂藏

○補泉堂藏

主従狭今日る所ハ本来の山賊ぬ
被し銃丸ぬ命を喪るとも
をうんのミ深く怨るよりもなけ
倖ぬく路銀の三ヶ寡を相揃り腰刀ぬ目をうく奪
剥えかくとも怨そとのんや汝ホ国守の家臣
わうんぎうぬ武士ぬるぬ懲しぬ打殺さず覚期をせと敦圉悍く鳥銃を
又振揚く打んとす浩然ぬ一人固の老人齢ハ五十許ぬ
腰ぬ藤柄の短刀を跨へ衢よりぬ来かゝく老ぬる模の蔭ぬ
岡窺ハく忽地ぬ走出く打んとしぬる信乃ガ袂ぬ携隔く推禁ぬ御旅人霎時
等せ吏小人事ハ當国ぬる猿石の村長ぬく四六城木工作と呼るぬ
先祖相傳の山林のハ日毎ぬ杣人を遣しく木を伐出せを旁の活業ぬ

より。けふも山よりかゝるさぬ不憶来ぬし事情を繩ぬ知まり。
どもとの方ざぬ小人ガ年来相識る主従をよりく和解奉る枉く許さ吏ハ
勧解ぬ件の武士主従ハ自脱を診ぬ打出てるぬ足を拯り身を起しく面目
ぬ跪き木工作よくそ来ぬひ元ぬ賊心ぬしん媼内奴ガ出来心ぬ
ぬの刀ぬるを被けしよりハの如く打出てり左も右も誘へく繻穩便を頼む
のそといへば又媼内ぬ只今主人のハるる如くいと苛刻く打伏られても皆是做せ
崇ぬふそとハへば洟く敵對ひせず賠話しくゝと掌をうち合しそ憑みける
木工作さそと頷きく再信乃ぬうちぬ對ひく目今ハ往ぬふ如し先非を悔る帰
降の怠状ぬれ程ぬいるぬへば好ぬ夕ぬ小人ぬ預けく放ち還しぬひねん腰ぬ携りて
無異の用捨を願まつりねうけコラぬと寛解ぬへば信乃ぬう憂く怒りを飲めく持
たる鳥銃傍ぬ投捨和殿の和解微りせば元ぬへるのそねども武士ぬるぬ恥を

沼あるべで命を乞ふをヨれ又打んや然らばその侭立別まえとくいまゝ也うといふを木工作松びく物數あらぬ小人ゲ寛解さうまをうけ引ゆゝ早の御許容辱し。折うら薄暮のるるまゝこの鳥銃ハ小人ゲ預り措てその主従を先ゆいまさび刺逐ーの御疑念もまうるべ一喃他雪きゑ所もあゝぼ名もあゝで行めゝの間の閑詩ゑれゞ遺恨あるゞ況てるるゝねどもこの火炮を選ーゆひくまゝ選ーせあゝかーといふゆ頷く武士主従ハ刃と歛め立あゝていまゝ趣その意を得うり既ゆ和睦の整ゆるゆいまゝ遺恨を含むゞ況さゞ如右ゆられまゝその鳥銃ハ和主ゆ預けん送まゝてもこのるを秘ゝ人ゆる知らーぬひそゆひゝ物ゆゝ媚内鬼を進ゝせまゝといふゆ奴隷ハまゝろ沼ゝ四足を拮ー獲ゆゝ鬼を両ゆゆ捧げく弓出まを木工作ゝちゝ頭をゝち掉りそゝーもなゞ貶めゝ配下ゆ世渡る俺们が斯むゝるゆるゝられまゝく紙一枚でも受ゆゝんや況まゝもゝゝ獲ゆゝを

ゆゝて何ゆせんそゝそゞ伏ゆ置ゆゝれゝと推辞と武士ハ聽むゝく。そまゝそゝ況謙退ゞれけゝ役義を離まゝるまれハ遠山の猟戸ゆるゆさゞゝの物受られゞゝ後日ゆ面を向けかゝ一今霄の着ゆ一ゆひてよと頻りゆ薦めく已さまゞ木工作ハ推辞るゝる鬼を受ゝ鳥銃へ索引掛ゝ肩被ゝう登時武士ハ恭一く信乃ゆ對ひく別を告ゝ躑躅ゞ崎のゝゆかゝりゆゝ従者も遠一く主の後方ゆ引ゝそゆゝ走る後影の着々ヨれえむゝるゝけり於是乎信乃ハ木工作ゆ熱びを速労ひて立別まえとゝけるを木工作急ゆ引とゞめく言卒介ゆひへども彼主従を打伏あひ一ゝ身の武藝をヨれを知りゆ諸國をゝちゞりて武者修行をゝゆゆゆ飽ゝゞゆ武を磨せゆまゝの國守の御内人ゆる儔ゆるゞうゆゆゞ何処を宿ゆゝゆひゝる既ゆゝゆ日の暮ゝまゞ今霄のゝ宿を仕らえさのゝ數ゝをゆゝゞゆ名告ゝせゆゝと慇懃ゆ問まゝく信乃ハ慝むゆ由ゝヨれかへりゞゝ微笑ゝく寔ゆ和殿の親切ゆるヨれこの州ゆ相識

みけるこゝろと憑しく死心地ぞする然るを今さら隠さんや吾倅は武蔵浪人ゆゑ大塚信乃戍孝と呼るゝ孝と豫て死生を契りし異姓の兄弟五名ゆゑ故あつて別れしより既ゐとや四稔を歴さりいそ遭んと思ひつゝ旅より旅を旅宿しくこの地へ来つるその為のこゝ定宿とそもめゝざれば今宵のあるじせしそれの歓びゐの所へ扶も彼武夫は武田殿の家謀狡何と呼る人ゆゑんと問ば木工作声を密めて寔ゐ賢察せしる如く彼人は國守の御家臣泡雪奈四郎秋實と呼まゝく山林管領を職とせしるゐ殺生を好こゝ夜ば暇ゐる折毎ゐあらの山ゐ獵くらして小人が宿所へも留らせ来夜のあれば見過しかゝく和解ゆく絆圓ゐ治ゆるゐ但彼人の為のこゝるゝず。こゝく村ゐ支ゐるれとゐ鄙語ゐ似る幸ひこゝ誘ゆ夜の深ゐ間ゐ宿所へ伴ひゐるゐらせんと是方へ来ゆきと先ゐ立てゆくこゝ既ゐ一時ばかりゐの夜初更の左側ゐ猿石の宿所ゐ届ゐあかくゆゑ木工作は女房夏引ゐ由を告小厮出来ゆホを呼すく

信乃を編室ゐ休らゐゐ夜食を薦ゐ浴をさゝゆゑ大ゐこゝゐ歓待ゆゑ信乃ゐ世ゐ淺かゐゐ歓びを述ゝく奴婢共が布儲ゐ臥蓐ゐ入ゐ躰く枕ゐ就きゐり。翌ゐ風ゐく出てゆんと用意をゐられどもこの夜俄頃ゐ初雪ゐ降て詰旦ゐゐ降歓ず山ゐ里ゐ白妙ゐ積ゐく深くゐ雪ゐ降ばいゐゐ出ゆゑ早飯ゐ果ゐ比ゐゐト木工作は編室ゐ来く信乃ゐ向ゐ今茲は夏の国ゆく今は十月の季ゐゐ節は十一月の中を過ゐゐ且ゐ雪ゐ降ゐく降ゐ似ゐゐ野ゐ山ゐ降埋ゐゐを言ゐ出ゆゑ旅ゐゐ且く退留ゐ夜ゐ明ゐく山野の掙ゐゐゐず小人ゐ亦徒然ゐ慰ゐ敵ゐ足らぬゐ聊慰ゐゐゐゐ議ゐ従ひゐとく辭を盡くゐ信乃ゐ有難ゐ推辭ゐく僅ゐその意ゐ任せゐゐ木工作斜ゐゐ歓びくきゐ泡雪奈四郎ゐ贈ゐゐ兎を調理酒を薦ゐく終日相譚ひ消けりとれゐ後ゐ日次ゐゐで或ゐ雪ゐ或ゐ風ゐ雪ゐく

降ぬれば信乃は頻りに留めれども日を累る隨に彼らの家の安うを見
ぬ女房は後妻なるべし。その名を夏引と呼ぶ。年才は三十四五許ぬやうん
ぞうえぞ容止も醜くぞ又二人なる女児只一箇ありて當面ゆゆしくもあるべど
顔は三月の櫻花に似て雨を厭ひ風を恨る風情ありて姿は秋夜の新月に優て雲に
挾まれ霧に消ぬべく歎きあるが如し常に奥なる據將を筑紫琴の調妙なり。
彼俊蔭が女児にも劣らじとぞ思ふ。その名を濱路とぞ呼ぶ濱路々々
と呼ぶを紙門隔に聞く毎に信乃は亡妻のことを思ひ出て壁に向ひて
嘆息す。現田舍に生まれて親に継しめれば伝へ聞く母は折々叱り
懲めて言ふも悔らるべし。孝行の大なるを故なるべし。見るに外は
他人の捞り知るべきにあらねども後に具に原ねて木工作が前妻は名を麻苗と
呼ぶ。四歳なりしが時疫に身まかりて後妻夏引は乳をのみて仕へ。

女児濱路が姥母なりしを渠が良人は世を去りてよりなほ存ふる濱路が乳母の
なるを外より娶るに優べとて木工作に推登して後妻にぞ奉りける然ば
夏引は初めの程は村長の妻なりしが家の女児は己が為に主なりけるを子と
なれば初一年ばかりの程は行状を慎みて些も継母の面色を犯さず濱路を慈
愛して内をぞ治めしかば木工作は竊に歎びて物の出納その他のことを任
用せる隨に夏引は早晩驕りつきて衣裳髪の飾はいと身のほど綺羅を
盡して濱路を初の如くにもせず剰へ國の守の山林管領泡雪奈四郎と密通
して良人木工作が杣木を伐る山荒屋に曉を夜に奈四郎を毎屋に引入れて
不義の樂を取ることなれども又奈四郎は或は村役或は山獵に假托して四
六城の宿所に起臥なれども木工作はそれを曉得らで只濱路のみ聰く猜て浅
からぬを恨む母を諫んとすれども父に告げるなかれと限りもなく父に告げるを夏引は

亦その氣色に察して濱路を欝悒きものとおもひ、いかで彼奴を遠離て後にまたくはべけりと思へバ折々良人に勸めて、濱路も既に年ごろなれバ、春よりまた女婿を擇まく思へどもまだ相應しきものも得ざりし。然バとて生心の妙子を遊しての宿に在らせバ果ハよからぬこともあるべし。守の奥隷達に便り討ねて給事にまゐらせん。暇の傍輩に接るも亦是修行の一箇にて、その身の爲に得ありといふうち聞く所の理りあるも、木工作は從はず。やゝ頭をうち掉りて、おん身の意見ハ然ることなれど、宮給事にまゐらせてハ、又縦嫺譚整ふとも年限果ねバ親の自由に身の暇を乞ふことならず。又愆ることあらバ、猛に暇を賜ふことのあらバとていひかへし。さる首尾つたなき筋あれバ親の難義にならんや。且うち捨て措ねと制めてうけ引く氣色なけれバ、夏引心焦燥て、いと甲斐なしと思へども強て勸るよしもなけれバ、いひさしてとおもふ程に、木工作ハ又いぬる頃犬塚信乃を誘引つれて歸來て

既に日を弥まで、夏引ハよろこび歡びて、人目の關のなきを幸ひに、奈四郎も亦折々来て音耗久しく絶しかバ、いよゝ深く親みて、怒りと相せバさもあるべく絶てのちぞ濱路を大く罵れども、わざ宿所に在るときハ一毫も然る氣色を見せず。濱路にハいと優しく物して、信乃にも茶をすゝめさせよ、爐に炭を續て参らせよと折々奴婢に分付て、眞實しげに欵待しけれバ、木工作ハ陰陽ある妻の底意を知らねども、信乃ハあまりの事情を大かたに猜せしかバ、屢わすれに別に立去らんと思へれども、木工作ハ只管とゞめて、管待すれバ弥増ぞ以かくて木工作ハ信乃が骨相進止の人に捷れしのみならで、その武藝の比類なき本事を既に見つるより、いで國守へこの人を薦めまゐらバ重用せられて俸禄思ひの隨なるべし。有此而濱路を妻せなバわが年來の願ひ足りぬ。さりながら此宛山の麓より出て大く打きたる泡雪生があからねく恨みて妨せんも亦測りがたし。彼人ハ是より上なる御家老

達が願ひ障りあるべきなるべきねども亦容易く所行あらざるべかりし
且秘措く犬塚ねーどが放遣るべき便宜を得るとうらぶやと肚裏に尋思と
思へ絆に假托け辭を設へて頻りに信乃を留めるるが態の懇切なるに振拂ふ
べき袖のなければ信乃は殆困ど果ひ姑くその意に任しても只徒然に堪ざれば此
家にいとふりたる太平記の閲本ありと借よせて繙きつ獨僅に慰るにも
十月の比ゆ田舍に耕作に暇あるべや奴婢ホも甲夜より臥房に入て夜
いたく蕭然なるまゝ然とて信乃はいもねられぬまゝ今宵も孤燈のうち對ひて
彼太平記を閲るに第四の巻なる中納言藤房遁世の段に藤房卿と相契り
なる左衛門局とう侍えーー女房許勤へる頭髪を遺り遺せとて黒髪の乱れん
世さへ憂へ思へと今般の形見とも思へとありーを女房にさうち授て書置ー
君が玉章身にそへて後の世までの像見とやせんと詠へて河水に身を沈めき。

又第十の巻なる佐々左京亮貞俊が辞世の歌に皆人の世にあるとは数
なるまで憂に漏ぬるなるべけりと侍えそはその妻誰見よと信を人の留めけん堪て
有べき命なるねにとよるべく俱にむなしくなりーるの又廿二の巻なる塩谷高貞譜
死の段この他新田楠氏父子の誠忠及新田の四天王と侍えける勇臣ホの終り
定なるぬるなるべきを二王彼と讀味に現忠臣の時に遇ざる佞人の驕恣なる夫婦の
情態朋友の信不信古を見べく今を見べ相別まつりけふまでも遭べく年歴ー
五大士のうへ心のとなるべく且妹と仗に名のみゆく節に死ーなる濱路なるべき胸に浮めぞ
浩歎ーの巻を掩へべく悄然なる背のうしろに人のくるべく足音もせず近つを誰也
と問へば濱路と答へ信乃は驚き訝りて貌を改め其方は對ひて日比その名を
呼るが洩侍えーより爽に知ぬるべ人のの今弱狀何ホの故に小夜深て獨
さへ来ーーぞと問へば頭をうち掉て否妾にあるべの女兒なれども今宵にあるべ

女児に給らせぬ。おん身と二世の契りある濱路を忘れ給ひし歟といふに、いよ〳〵怪みて其は何事をいはるゝやらん。わが舊里にありし時、結髪の妻の名も濱路と呼まして
ありしかども、身まかりてはや四稔になりぬ。然るをおん身に云云といはるゝは、そもいかなる故ぞといふを霊妾は時うち目戍して、縁故を知らでは、しか思はるゝも無理ならず。妾は
四稔さきつ夏彼左母二郎が非道の刃に命果敢なく、圓塚なる火定の穴に葬られて骨も留らずなりしかど、魂魄は尚旦暮におん身のほとりに貴縁さへ
まく欲きるゝもあるを、陰鬼陽人方異なれば本意を得遂ずいたづらに光陰を過し侍りしに、はからずもあるじの女児の名の妾と同じきのみならで、おん身と月下に結ばるゝ宿因あれば、その形體を借りて事情を告侍り。曩におん身を妾が為に生涯妻を娶らじと宣ひし御心操の有がたさ、恭く歓しく侍れども、その言の葉の末遂くねば、これを忘れ給へと緯の便宜に任して只この妙を妾と

おもふ縁しを結ばしぬ。よりやとなむのゝ家に就ていで禍鬼の暴ることも亦あり。なく幸草の花さき實結るよしの侍らんかくまでに先路を急がせ給ふに遑留まゐかしと告る言語も容止もよく亡妻に似てありける縡の不測に、些も驗ぬ信乃は涕くうち俯きて、幽冥の鬼神のうへは凡智に測り易からねども、男女夜深く相譚は是瓜田の履李下の冠、人の疑ひをいかゞはせん。その身の宿意を告んとて人の女児に濡衣を被まするは仁義の所行にあらず。されども亦この故にわが丈婦の恨を慰めがひのひとくいよあるべし。とく〳〵立去りねかしとやといひまくとうち泣て、家にてやさのミ厭はせねなんぞ。人の形貌を假染にものいふ暇を得るとも、靈玉おん身を守らせ給へば、心後まではよひしるをいひ尽さぬにかへまとも、暁鐘きぬきぬの鐘より強顔き捨言葉、心つよしと怨むる折から、隔の紙戸を礙とひらきて、淫奔者を見出しつ、衆皆起よと呼るものは、是則別人ならぬあるじの女房

○補泉堂藏

○補泉堂藏

夏引は吐嗟と驚きて濱路より信乃に有繫に。うち騒ぐ胸を鎮めて。やよ内侵漫
なることないひそ。令弱のさいに来まつせしを不軌密通の為なりとて別に所以ある
るゝ事ありといはせも果ず冷笑ひて。否宜なる論より證据。親の寐息を窺ひて
夜這ひし女児を引容るとても不軌ならずといふや。いひつゝ立んや急とて起よと呼立れど
応と答て子舎より出来介。寝衣の侭なる犢鼻褌帯に麪棒引提て走り来つ
豫て濱路に思ひかけても稱ぬ恋の遺恨の返報。今宵の歎にかまて冷ぬ火盆に
撲地と蹴けお揺まる團炭の破も口も圓くはなさまぬ折を得たりと声ふり
立て客人よきゝ召されし。かねの秘蔵の閨入女児を疵物にして。勇悍しくいひ
争ひも誰か聴ん。盗児めが相応しき連枷代りに元奥せんと持たる棒を振
揚まあゆやよ等出来介。無礼なせそと禁るおりの一声に進もかねたる出来介は
麪棒杖よつ立て夏引が背後に退きけり。登時おほど木工作は進みて入り坐を

占て左見右見つ夏引に對ひて濱路に些の情由ありとても小夜深たるに人
騒しある出来介を呼起まつるは不覚なりと窘まれて夏引は忽地勃然として
かれ身が例の落つき貞なる妾が豫ていはざるを濱路を守へ願ひまうして給事に
まゐらせぬへ生まれつきたるものを遮しての宿所に在せずよからめと諫め
あれども鬼の毛の頭に置露ばかりも聴かで今宵に及びしを悔しく思ひぬるぞやと
席薦敲きて敦圉くを木工作聴かず頭を掉て。あな量なや伉なし濱路はともあれ
かくもあれ犬塚ぬしは人の女児とみたる事やは。まさしくそれ今渠に向ふて。あなと
默して去づらに他の東を推禁めて女児に對ひて濱路は何ほの所要ありて夜深てここへ
来たりしぞ。悪を告よいかにぞやと屡問まで恥かしげに頭を擡て四下を見かへり
何の故ぬや知しからしを向せあるに心いつきぬ甲夜よりうちしからうち臥して熟睡たりし
夢かうつゝか美しき少女子の枕に立て呼覚し。今宵かれ身を労して大塚ぬしに如比

如此とのいふく欲きうの侍りまるを又来まと先ゐ立てく伴ふこゐひしのそその後の
るゐふ〜ぞ侍りそゐ何事といへるゆやもんぞめて覚る心地して面目もなく侍りといゐ
當下信乃ハ感歎の髀を磯と打拍らく云ひ合よるよう〜ありあるゝれ支
婦ゆゑへ某舊里ゐ在り〜時結髪の未通女ありその名を濱路と喚做〜うり
介るゐ渠ハ故あるく悪棍の為ゐ勾引さ且〜を従ゐぞ〜て節ゐ死〜うさ且ゐその
名も年紀も似うる息女の屍體を借りく今霄竊ゐ某ゐのいひ〜のめハ亡
魂の所為とゑ〜れく寔ゐ奇ゑかとゞ疑似の傍難を解ま〜るゆを願〜け且と
ゐゞ出来ゑ腹を抱く俯ゐ仰ぎうち笑ひ扨ゆ〜らへうゐか且〜さり餘程実のある
作ゐ且ゞ死霊ゐ在る當座の脱路有理ら〜ゆゑれども僕ゑどとろゐぞ阿家
さゐ感心ゐされ〜欤とむゐ火つけく嘲けるとさてそと夏引ハ頷きく人の沼ゑゐぬ
故郷のゐ結髪せれゐ妙もなゞ〜名ゐ〜欤ゐゐ寃魂の所為ゐどハ證据も

あ〜で疑ハ〜然とも正〜ゑ證ゆ侍るとと詰るを木工作推禁ゐく復〜ても出来ゑ
奴ゞ濱路ゐゐの穿鑿をゐぞぶ汝ま頼むゑ無益の口を喋んより臥房へ退りて
睡〜ぞや夏引も亦大人氣ゐ〜数ゆも足らぬ小廝の過言ゐ相槌を打んとやゐ
ある寔ゐ女子と小人ハ艱ひゐゑゐのゐそと歎息ゐ〜信乃ゐ對ひて大塚ぬ〜ゐ
ゐゑ口舌を傍痛く思ひぬゆ妻奴子ハ左もい又右もい又某ハ疑心ゐ〜願ゐハ心意
ゐゐぬひそ殊さゐゐ欤〜ゑハ女児と貴所の亡室と同名の義ゐ仗く且凉ゐ〜ゐ
馮りくゐのいれ〜とゐハ一奇談ハ俺们親子の幸ひゑ既ゐまゐの便宜をゐう先や
胷憶を盡ゑべ〜某原ハ信濃の人氏蓼科太郎市と呼ま〜ゐ〜獨児ゐり
親ゆゑハ太郎市ハ井丹三直秀ぬ〜ゆ仕へ〜ゐ直秀ぬ〜ハ春王安王両公達のち
身方ゆく結城の城ゆ篭りぬひつ嘉吉元年夏四月落城の日ゐ血戦〜て竟ゐ
陣歿ゐぬひゐゑとのとゑ蓼科太郎市ゐ既ゐ深痍を負〜ゐ〜て信濃ゐゐ〜て

その方ざるゐ云ふと報ひて舩さ腹かき切さ冥土の供を仕りね某ハ尚総角ありしゐ
母ハ年来寸病ゐよりさそのさ死つ春世を去りうさまぶ結城の残黨と里人ぶゐ
心をおけが舊里の住ひ遂ゐ稱ゐぶこの地ゐ外伯父ありかぶ行さ身を寓せ
伯父夫婦ゐ男児ゐさ只一箇の女児ありその名を麻苗と呼做しうり有此而送
年長さ女児を某ゐ妻ゐ壻養嗣ぶぞせられける今後養父母ハ世を去りて某村
長の職を兼嗣ぎ且相傳の山林ゐ富むあるねど貪ぎもあるぶ今ゐるゐ某
弱冠より殺生を好ミかが暇ある折毎ゐ只山猟を事とさ鳥獸の命を捕ること
いくそばくそとのふと覚ぶかる故ゐ齢四十ゐ近ふぶ子ども一箇もあるぞゐなければ
麻苗ハこれをうち歎きさこハ殺生の報ひゐるべしと孫の栄を樂ひゐぶ山猟を歇め
さ只管ゐ諫めをよくもゐる聽ぶぞありけるゐ一日黒驪の邉中山の山間ゆそいと大
きなる就鳥を獲ゐ況かりて程よその処より一町あまり山邉ゐ樹杪ゐ小児の泣声

せしゐが怪しと思ひてゐ沿ぐ見るゐ年二三才許ゐ倨子の老さ樗の杖ゐ挾
さ声嗄るゐぶ歸てをり登時某ゐ云ふかる深山の樹上ゐ稚児のゐ
べ死理ゐ彼ハ就鳥ゐ攫さ雲時彼処ゐ措さ云ふ然ぶ鄙ゐ撃
ぶ就鳥ハゐの児を攫ゐ狡そゐさまれゐもゐさうち捨措んハ不便のるぶ
卸しさ見ぶ樹ゐ登り辛うじぶ抱き卸しさよく見るゐ尚仙き女の子
貴人の息女ゐやゐ七宝を揃沿ゐさ篠龍膽の服章ゐ紅衣の袖長き
被さ下ゐハ緋の衣を襲ぶり何処の誰ぶ子ゐぞと問へどもゐを汚ゐ二才狡
三才の稚児の泣より外ハ呼為もゐ知れぬ且懐ゐかき抱きゐ撃留さ件の就鳥ゐ
只美羽をのミ抜とりさ相携ぶ宿所ハかゐ女ゐ妻麻苗ゐ云ふと有ぶを報知せ
ゐ麻苗ゐどろき且驚ぶこの児ハ天より俺ゐ夫婦ゐ授ゐ給ひしゐのるべし
これ就ても殺生を必ず止めゐとさ涙さぶ諫るゐぞ某ゐ感悟

あること五年より後ハ獵に出で扶女の子に乳母を隷く愛慈を艱みそが名を
ぢぬも知るよしなければ軀き餌漏と名づけ是こへ就鳥の餌に漏さく子とな
しと義を取りかくそのを呼び論ども顔を背けて答せずこハ名のこころに
悒ぬ故歟と思へば屋名を更く呼べども応をせずかゝる程に此村より一里ばかり
東のくさに字を濱路とのふ六齋の市場あり奴婢そどぐ其処に到りて物を買
ふ来つる毎に其濱路なる物ぞかゝ濱路々々とのふ毎に女児の見かへりて
笑ひ必応けり扶ぬこの子の舊名ハ濱路と呼ばゝ濱路と呼ぶま
優にあゝと妻も如右ぬこの時より形のごとに名づけたり。
かくて六七才の比より七手習縫刺の技ならへ書よむるも管絃もその師を
招き学ぶ。さて年来あるに前妻麻苗ハ四稔已前に亡ぬ。
内を賄ひの乳母を推登く後妻ぬ濱路が乳母を推登く後妻ぬ濱路の夏引

是ハ渠ハ良人の子を夫死別をせしめ久くあり仕へる素より乳
母のゆゑ我ぬ得ぬ女人を娶らんより濱路が為ぬよるべしとのへば如右
計ひのこのゝ人ときに増をとき春の比より彼と心ぬ撰めど者ぬ死の計も
あるべきぬ過せ。よりあれ身を宿所す留めるあるせ蓋量骨相
進止武藝ぬ捷ぬ人ぬ面りぬ人く情願ありいそ濱路が壻ぬ欲得
とのふのゝらいふ村長列の某ぬ壻養嗣ぬ人ぬ便を討ぬ守ぬ
蔑ぬ御内人ぬ成まるせ。この便宜をのく云とよりを告婚を結びくるが
宿願を果さんと思ひのゝ女児ぬ妻ぬ告知せぬ立ぬ
ぬ事ぬ假托け推制ぬ一日々々と過せ豈測らんや今霄の一奇事。
世ぬ死ぬ身の内君とのふ女児ハ同名ぬその亡魂の女児ぬ憑りそのいれ
ぬ死人の再結ぶ縁ぬそ願ぬ愚衷を憐みこの婚姻を許ぬ世ぬ某が堅足の

て、兼ねぬべと繰返せど芦環なくて長物くさ冬の夜還て短きをも暁方ぬるぬ。

第六十九回　仕官を謨く木工作信乃を豪留を　給事を薦て奈四郎四六城を撃ん

信乃はわが〻木工作が昔かたりをうちぬきく感歎あく扨いかう一樹の蔭一河の流も縁あり三ぬ寓くこと世の常言ぬいと宜し吾倩ぬ和殿をそ居停主人と。原来井丹三直秀ぬ仕へる蓼科太郎市と年ゝの児なりゝ狄。今ぬ又何をか隠んぞ毋は諱を手束と呼ばく則直秀ぬの女児なり。大父大塚直作三戍大人は直秀ぬと共侶ぬ結城ぬ籠城あく折子共の為ぬ秦晋の因を結びあひしなり。さぬ是その義を果さんとぬ大父が直秀ぬも共ぬ戦歿あひしぬ。後如此々々の故ぬ〻くぬ父大塚番作大人と直秀の息女と環會く迭ぬ素生を諦ぬ親と親とが結髪なる妹と伏られば異議も

なく。躰く丈婦ぬなりぬひく五吾倩を産ぬ。ぬ二親の夜話ぬ直秀ぬの戦歿のその縁の趣も故郷へ計を告来ぬる彼老黨の忠死のよしも傳聞ぬるのみぬ姓名を何とのひけん定ぬ紀憶せざりぬ和殿が今霄の物ぬりゆく稍具なるをなり寔ぬ不測の因縁なり紀。とのぬ驚く木工作は且歓く頭を拊ぬ〻ぬひ〻ぬ紀ぬ〻ぬ実父の主君なる直秀ぬの外孫なるぬ為ぬ亦主筋なれぬ。とぬりぬ只顧感歎あく。けるさまぬ又この幾條を側伏せる後妻夏引は直と呆れたくのよりもなく出来ぬと目を注ぬ。ぬ〻ぬ〻ぬ〻ぬ養母の心と表裏なる濱路は實の親の名を知るよりもなる紀身の幸なきと又拊育の恩高き養父のひをなひ汲む涙の泉ぬと切く押拭へども乾ぬ袖ぬ暇ぬなりけり。信乃も頻ぬ慷慨嗟嘆の貌を改めぬ〻ぬ對ひく喃四六城の叟親ぬ大く宥りぬる五吾倩なれども懇望せられて

令弱とのみ妻せんといはるゝを推辞てありしが。さばれ郷尚にもいへるが如く年来死
生を契りし異姓の兄弟若干あり。相別れしより往方をしらず。この人々に
得あはずして妻を娶らんはさらなり仕官に就くも亦不義也。静に時を俟ん
のみこの義をはいはざりしか。いかにとなれば木工作は你ぞその然るもあるべけれども。
その友達を索るとて一トたび立去ものゆゑその日にかへり来まさん某今
茲は五十にあまりぬ末遠からぬ餘命を憑みて限りある日を俟ぬ由なし。然まで
婚姻を整へて介後に彼人々を索ねなんとも遅きにあらじト枉てこの議に従ひ
ねと辭を盡して薦れども信乃は頭をうち掉りて否何ぞりになるとも己が
心は巌の如し聊も轉べうもあらねども婚姻を只管に嫌ふにあらず亡妻の
云云と告るよしもあるなれば縁觸ぞあ取娶りもせん目今は兼引きし大丈夫の一言
隻句は年を歴るとも變易あらずかくまでいふて聴ざるは袖を拂ふて去らん

のみ強るは要なきことならずやと言語急しく説諭ぜば木工作望を失ひて沈吟
するこゝ半晌ばかり伏て頭を撻て如右宜へばせん術あらざるかその時を俟の
外なし就て一箇の願ひあり今茲は雪のおほく降ゆゑに道中尤不便なりよりて
春まで逗留して世間長閑になりなん比出て友人を索めなば冬の籠りてまする寒
き日に都鄙の巷に行人稀れ人を索る時節にあらず切てこの議をうけ
引ねと又他事もなくかき口説ば信乃は僅に頷きて四稔以来環もあらね
ことなど友達を索るとてもよしや一ト月五十日をまに遅速を争ふとすその甲斐あるとも
いかでかはしらず今茲をこの地に送るべしこれも只好意に悖らじと思ふなる愚意を
枉なり今少選貴宅の衆の厄會にてもあるべけれどいふに木工作歡ぞ一寸延まず
何とやら常言あれば逗留は本意に愜ぬいと愛たしやよ首引も出来ぬも面推
出して勸解ゆゑさばや犬塚ぬしこれにて主筋一ト口に寄る客人あそぶ倘又無禮の

王言を出さざるの度ごとに決しく允さでさく勸解ぞやといそがざれば夏引しを続ぬ
膝を進めく然る方ざるとなぬひるなぞ腹立しきぬこれを忘まつしまよるを過言
持病の痼症只後悔の外はなしぞ海をまつしまぐめかき流しく心ゆる被ぬひそ
歎待とて侍らねども猶ぬしまでも逗留を願しくそとうち賠諾まづ出来ぬ
稍膝行出くお客人さま御免なりきを呼起されて宵一夜
ぬ樂ぶ翌の眠さを想像まづ主ぬ忠義も要るをもの狩とぬるかくぬる奉公
なるり苦しくぬのぬるぬ御免々々と虚口詛咒ぶまく賠諾まづる胸ぬひくを脇
身衣無禪ぬる膝頭隠さん為ぬ額つけば衆皆咄とうち笑ぬ信乃も笑ひを
咳逆ようち紛しく夏引ぬ無異の応答言託まづ木工作ぬ又改めく濱
路を信乃より引ぬしく寶主和譚の欽びぬ久後ぬひをまつしまるぬ嚮
暁六の鐘ぬ衆皆立別まく要時臥房ぬ退きけりかくその後木工作ぬ

肚裏ぬひらぬ〇大塚ぬしまぬ在しく長く足を駐んぬ守ぞまぬ願
ぬしく〇御家臣ぬるすぬ〇然けれども故もをくぬ職分ぬしぞ
るぬ〇出んるぬ輒しまず獨泡雪奈四郎ぬしぬぬ少かりし時殺生の友ぬり
ぬまづ今もぬ公私のるのまぬのひ易かりこの人を誘へく頼ぞやとぬぬいぬる
日ぬく大塚ぬしまぬ打まづをぬ遺恨まぬぬ又ぬ一箇の拒障ぬ且何とぬく
彼人を招きぬしく大塚ぬしまぬと一席ぬ酒食を羞めくぬ中を直しまづ彼
人遂ぬ恨を祛くぬ願事の執次ぬぬ優ぬる捷徑ぬしぬと尋思
ぬる為く決ぬしぬ後妻夏引ぬ耳ぬきくぬぬ信乃と奈四郎と閑諍ぬり
しく縡の趣箇様々々と報知しく且奈四郎を妨ませんとぬる信乃ぬ仕官の
王車の二條ぬ彼和睦の方便まづぬ遺ぬく説示しく又その意見を問しぬ
夏引ぬしく歡びまづ腹黒き女人ぬまづ此ぬ驚ぶ俱ぬ教ぬ面色

主人ども腰裡にさふあらぬ濱路ぶ宿所よ在るごふも目上ふ萠く癈るるふ又犬塚を壻ゆゝく守の御内人ませられ給ひのゆゝくるぶ為よるべ兒綽の障の是彼ゆく奈四郎ぬゝまあひかさゝん然がとく今禁めそふ疑ま人ふ必定え雲妻時その意まうち任ゝく奈四郎ぬゝを招ゝく扨彼人の来ま者ゝ折ゆ意中を告く商量せば又よ沁尋思のるゝぶやとふひまければ只管ゆその分別を稱賛ゝく泡雪ぬゝを一日もまく招きゆへとふそぶそふぞ木工作ふく心決ゝく次の日奈四郎ぶ宿所よ到りく對面を請ゝく寒暖を演ふる首より預を置る彼鳥銃と返ゝたふ。比宛山ゆそ彼事ゆゝ旅客ふ某ぶ主筋ゆく犬塚信乃戌孝と呼ま。る武藏州の人氏ゆりよりて宿所よ伴ひかへりそ今ゆふ逗留せり。勿論かの時某ぶ和解よりく無異よ沿り當座よ和睦ふ成ばば遺恨あるべゝるゆゝねども時宜よりく彼人も長く當地ゆ在著くべ。より入懇を願ふぶ為よ薄酒を薦めゆ申せんとく案内ぶそふゆ推参せり願ふふ翌の未の比より光臨をゆゝく待奉ると可寧よふふまく奈四郎歡ふぶ肚裏ふふふゆうこれ項日ふ獵ゆも出ぶ四六城ぶ宿所へ立よりて夏引まゆふぶふ今初ゝその名を伺ゝ彼犬塚信乃と申ゝよ主従ふく打まゝる面目ゆ彼よよりそ然るを翌又宿所よ招きく。彼奴と一席まく酒を勸んとふふ木工作を又是信乃ぶ方人まく飽ぎこれを破滅ゆ付んと較計るゆぞゆうんぞうん。公りとゆ申ぶこれ只後ま人ふとふふまんその意ふ任ゝ彼処ゆ到りて倘堪ゝ充るゆふ信乃と木工作一家の男女を麾ゆく逐電せん。三十六計詐欺を上とす。嗚呼公ゝとふふ心を氣色ゆぶゆも顕さず頻ゆふ領き合笑ゝく今まで申ぬ和殿の親切ふぞふ行ぶゝん彼犬塚ぬゝと申ゝん和殿ふ舊縁ゆるよりまく逗留ふ珍重ゝかゝと知ゝば疾ゆる訪ゆく教諭の益を沼べりゝふ疎遠の

怠慢悔まじも及ぶぞ犬塚ねまもられらのようを言傳さゆゑ翌日此の公務
わりとるそ同僚よ委ね措く時刻を違へぬ必ゆえさぶれ我ホが為ゆきるべ酒
食の儲いわらぶもようう相譚ふそ樂きうれと實ゆふ応對ゆう扶茶を薦め
果子を羞めく大きるるぶ管待ゆえぶ木工作ハ意外の首尾よ且歡び且感ゆ
翌を契ゆく遽ゆく家路を望ゆかへりけりかく次の日よりゆかぶ泡雪奈四郎
秋実ハこの年来親ゆく使ハ媼内嘱内とふ両箇の奴隷ふ事情を具ゆきゆ示ゆく
助大刀の為ゆく両人共ゆこれを従へ曽試の利刀寝刃をゆゆく肌膚ゆハ鰷の
著笹をめゆふ倉織の馬上袴よ仁田山紬の小袖二ツぶう被て来の半過る
比四六城ゆ宿所よ赴きゆれが木工作ぶゆう出迎へく客房よ請ゆく腕て盃を
勧ぶぶ後妻夏引て良人と共よ肴を添え酌よ立る歓待態大かゆるず
盃一巡よ及ぶゆえ木工作ハ編室ふ赴きく信乃よりゆる日途ゆく事

ゆゆ一奈四郎ゆの詣来ゆゆく對面を請ゆふ聊酒食もゆへふ客房よ赴き
ゆゆよ然ふぶ篭ゆきくゆゆえんより亦徒然を慰るよゆぶよそゆ客ゆ誘ゆへく
ゆそゆ立るを信乃ハ有繋よ推辞ゆるゆそハ一段のゆえゆ衣脱更て程ゆくゆん
和殿ハゆぶこのようを泡雪ゆよ報ゆへとのゆよ木工作遽ゆく介ゆぶ彼処ぐ俟
奉らん疾来ゆとのハゆく又客房よ赴きけり當下信乃ハゆゆう彼奈
四郎ハ小人ゆ武士よ似けゆく漬ゆる手癖ハ既よ見届けくるふ彼奴と席を
倶ゆく酒食の歓待よ與らぶゆ盗跖を友ゆく悪木の技よ遊ぶよ似へう
ゆゆぶゆがゆと心ぶゆ川弾をゆつれども凄ハゆもゆれかくゆゆ一木工作ゆ懇切よ
誘引へゆと許諾ゆゆぐ已ぶゆゆう絲ゆ行祓をゆう被きく衣ゆ袴を
穿ゆく村雨の一刀を腰よ帯ゆ扇を拿ゆく件の席よ赴きゆ奈四郎ふ對面
ゆく一別已後の安否を訊ねゆぶ席末ふ坐を占ゆぶ奈四郎差て席を譲ゆ

上座に請薦まれども信乃はいよ〳〵謙退して聊も膝を進めず靜かに四表八表を相譚ふに辭寡く愛敬あり先度のうの心ゑて一如く武藝に誇る氣色なきまで奈四郎はいかに違ひて豫その用心齟齬しるその機を測ることかべ心ともなくうち解く只管信乃を敬ひけり然程に木工作は准備の殷数を盡しく屡奈四郎に盃を薦め從者媼内嫡内さえ次の間に呼登し出来仇ホを敵手にすく酒うち飲せるとまる程に冬の日あ没果うかく木工作は彼此に燭を点さく奈四郎主從信乃ホに夜食を羞め復盃を更めく饗應ふく叮嚀なれば客もあ〳〵も醉ぬるし且しく奈四郎は中刀を引提さ和とり淨手に立んとまれば夏引は絶に便宜をるく紙燭を乗りく先に立く縁頬なる障子を推開き東の狹室に案内をして物の蔭に立聚合扨ある夜の繁の趣濱路とおもひ名に依く犬塚信乃が亡妻の灵の憑しと

ひしるに及木工作は信乃をのく女婿にまくまで欲するのまで辭みく長きく濱路が宿所に在るごとのもの身にあふ夜の邪魔なるに信乃さえ女婿にせれるべいと中垣を居られさくあ瀬は遂に絶果ぬ濱路を遠離信乃を去る謀へあらまとと問ふと奈四郎ぬあまで彼犬塚奴はいかに仇ぬかの折他御へ赴ぬ扨あらんをいまそやけふまでぬに苗ゆくる木工作も亦怨しけれ且等ゆと頭を傾け霎時按じく莞爾とうち笑ひ繁倉卒の折なれども妙策胸よいでまう箇様箇様に詭計りく濱路をもやく遠ざべ濱路をもぬると死は信乃も亦退屈しく必他御へ辷ん登時途に埋伏しく間髪をいれると死は先度の遺恨を霽さま足さうこの謀はいかと真〳〵を夏引はいつ〳〵合笑さそは究竟の如案へ不覚に脱落ふを謀し合しく遠しく先に立ん又案内しく舊の坐席に伴ひけり然程に奈四郎はいたく醉る面色に頻ふに盃を推辞しぬ木工作も

浮るゆく奴婢は盃盤を納さらく某と薦め果子を引く程ゐ三更の鐘の
音ゆるゆゑ奈四郎ハ鄭重心の歓びを述別を告く従者ホをいそがゝ宿
所をさらく出るけゞ木工作夫婦信乃さへ端らうくこれを送りて無異な
酒宴と果子を祝ゐ却説次の日木工作ハ泡雪許赴きく駕を枉られ〻る歓
びを述やとゐひゐぐら猛き村役のゐ〻いで来く両三日その義を果さゞか
ら程なく第四日は至りく奈四郎ハ奴隷懸内は一通のゐ簡と一ト壺の葡萄
美を齎しく木工作が宿所は遣しけれが木工作ハ畏ぶ懈の便かゝりとて
ゐちく聽くその書を披きゐるは初ハいぬる日鄭心の歓びを書盡しく次は
公私の所要ゐれゞけゐ翌の間は對面せまく欲るゑ就く珍しげゐ物ゐぐらとの
一壺ハいぬる日の謝義とくゆゐるゐる餘ハ面會を俟とあり木工作ゐゞく讀
返しいそく硯をうゝく回報を叮寧ゐ書写めゐぐゐゐて出く使は遽ゐ
高味の一種をゐるその有るこゐをゐ摩し追つきく参るべ此よりまうしぬと
ゐを懸内にとゐる果く躑躅が崎へぞ帰るけゐ目しく木工作ハ告る拍らく
夏弓を呼く泡雪ゐしゐ使をめて招き更ゞ今よりゆゞべ例の袴を出しぬゑ
両三日巳前より行くいぬる日光臨の歓びを演むやとゐらぐりまあくねども村
役は拘つゐひてきのゐゆでゐその義をゐるざり紀けゐハ朝より暇いありしを昨宵の
夢のゐゐかゐく宵さへ折くうち騒げハいと懐くく後手まゐりぬ告るも盃
ゐゐ紀ゐるゐるゐ昨宵ゐゐ枕方は入るゐ鳥獣のいゐとゐるく聚ひ来ん
牙を頭し蛸を鳴しく責るゐ大くゐるゐぞ或ハ頭を喙くあり或ハ吃は喫著く
あり〻その苦痛いふべうもあらざゐハ叫んとゐるゐ声ハくぞゐゐや全身を食盡されて
骨も遺さゞゐるきとゐひつ駭き覚ゐり怪有る夢なあるぞやと若る傍は
濱路もゐつゞくとうち伏くゐゐゐと怪しゐ紀夢えけゐ一日ハ齋しく出ぬは

優とあらんと禁ると夏引は冷笑ひて噫のめく〳〵何ぞ〻ん然る物は魔
ものの人ん身の壮るゆゑ比殺生をのみ事とす獵ら〻ゆゑを今ぞ悔
あく学ぶの心よりなほ夢まそめ学れよるべの車は祝ひ柄よるもいふのと
泡雪ぬ〻は拓まく行んといひつて行あはそのぬ出てそれ〻夢ゆゑ〻ん〻の
為は沼あらんとく出さぬゆゑと言語雄々く説破まぶ木工作然と領
きくして落る袴の前とりつ片足脊ま踏入る後方は膝を突立て夏引が
窕る腰板も良人の心い斜なる桟留縞の三條建結ぶ手加減四條の紋の長〻
短〻定めるる人の命の果敢なるもはとこの世の別まとは後ゆぞなひ合れ
ける然程は木工作は只管路といとぞつ奈四郎が宿所は到まて云云と呼門へば
奈四郎躰く巳が便室は呼入れく對面も迄の口誼言訖まぶ豫く准備やあらう
け媼内幇内給仕〻く盃を勧め肴を按排く歓待大きるゆ〻ざらけり盃四五

度は及び〻と応奈四郎は両箇の僕を庖厨のうちは退かく膝を進めく木工
作と額ど合て其くゆう今日招きまうせ〻るは愛さかるべ応密談ふよまり
足下ゆる豫く知るる如く御曹司信綱君（武田信昌の嫡子 虎の父）
是まより容止いと美〻て素生賤〻かるぬるの女児を擇ばく壁妾よまゆるうせよ
とある密誕を兼奉まゆ就く愚按を回らをは和殿の今愛濱路とゆ〻んは標
致といひ心操といひ世の評判は隠れる〻甘ゆる亦貴宅は外ぬ〻ん応てこれを知れり
かまぶ濱路を某が姪とまう〻〻做て信綱君はゆゆ〻ん御寵愛日は倍して
世嗣の君を産〻ゆゆ〻その身の栄華いぶさう和殿は國守の外戚るべ〻その流る
依る某さ又面を起を出世の緒誰ゆいとこれを美決ざう〻ん再ゆる応洪福ゆれ目試ま
云云と伺ゆえめげ奉ゆ〻まゆ歓び浅ゆ〻ぞくその濱路をまゆ〻せよと今朝〻も
仰下されゆよりて御談を傳るゆ毎く支度を整へゆ〻ぶ宿所はでおゆり来されよ

忽諸にするにはあらねども、真しやかに説示せば、木工作は嘆つて太息を吻き、呆れて霎時もの言はず。○いと恨しげなる気色にて言ひけるやう、現に汲引の如く濱路を召さるゝ縡の一條、一両月も已前なりしが、障りありといへども、渠は某が主筋なる犬塚信乃と既にはやく婚縁を結びたり。いはゞ披露に及ばねども主ある女子にはいへば、かの承を仕らず、この義をのみ左も右も答へ得げ申しゝといはせも果ず、奈四郎は眼を瞪らし声ふり立て、木工作それ何ごと、いふ犬塚信乃は他郷の浪人、猿石村の人別に載られたるのみならねば、口約束の媒談あればとて、しかと定めあるべきや、濱路がやうの某が承をまうけ今障りをまうし出なば、汝亦一家のことならで子が身の罪を脱まで一期の浮沈にあるなり。漫なるものぞといふとも、深念なくよいらふぞやと睨詰たる面魂、寄ぶ刀を拈て權せども、木工作は些も怯まず、いらへは宜ふとも親の許さぬ獨女を娶て側室にせんとぞ。罪なき人を殺しなば民の父母なる君をさへ、甲斐四箇郡は常闇になり果ぬべし。○みづから思ひ定めかし。婚姻はその住所の遠近に依るのみならず、よや他郷の客人とても、媒を結べば是より親し。況て舊縁ある人をや。さればこそ我が誠心もて濱路が為に紿事の汲引せよとおもへばこそ、初より某が胸中をよく問決めぬ。扨然後に云云と答へあるべきあるに、他人の女児をとるが物貝は親ならずとも、姪とぞ守を誘へ出しにと憚りあることなれ。只且千慮の一失、扨も疎忽といふべきのみ。某は数ならぬ愚癡の匹夫なれども、獨女の色をもて栄利を欲するを恥とも願ふ。女児濱路が代に犬塚殿を薦揚さ御内人に召措るゝ事、計ひまゐらせんとあれば、彼犬塚は武藝の達人、當今無双の賢者なる俊士を汲引して守の御用に達ゝ、美女を薦めて栄利を得る先案と遲延ありかくぞ、君の禄を食む良臣といはれめん。これより外に陳べきる答はなし。暇まうせんと身を起し、酒気を帶たる木工作が常にもあらで敦圄暴く席を蹴立、紙戸をあらゝかに外面へ出んとすれど、奈四郎は節にまた木工作に罵辱られて怒気

獣畜の化ヨハ文外の画ゆり看官宜意を
解せべ
春内
木工作

拙工
不成自又
破之
奈四郎
力内

胷に満腸燃て面色宛焼が如く争んとするに術をなさざれば柱に掛たる鳥銃をとりて
取り手早く丸を籠て火縄の頭を指燻る火盆を閃りと跳り踰て遣り過しつ追蒐出る
折戸口よりつかれて出せば木工作は二町ばかり家路のかたへゆく処を火蓋を支て撞と放すが
憐むべし木工作は七九の命の息遣より腹まで破と斃に抜ける両銃丸に霎時も得堪ず
骨砕け腸断離まして苦痛の声と共侶に仰反仆まして息絶けり二の物響に驚て其
家両箇の奴隷媼内ホを奈四郎は手早くからめて此百姓奴が法外なる過言を汝ホも
聞つらんぞ其も活ておくされぬ癖者なれば撃に留めしを此侭守へ訴まうさば身の安
危測がたかりなん計較もあるなれば とく死骸を引入れよといふに媼内胴内は斉一
彼処に走り決て木工作が亡骸を宙に吊して奥庭なる樹蔭へ舁て隠しけり畢竟
奈四郎が木工作を撃殺して又甚麼なる話説かあるそれは次の巻に解分るを聴ねかし

里見八犬傳第七輯巻之四 終

曲亭主人自評して云大約犬士の妻子眷属なるもの濵路沼藺雛衣曳手
單節ホハ貞操烈よのつよき捷まして咸薄命にして夫婦偕老に至るものなし是も
所以あるのみるを今いまに解盡しがたかり全輯結局の段に迨て肯綮氷解せるよし
あらんそが中に沼藺雛衣曳手單節の四婦人は各々良人に斉眉く日の久しからず
あるがども既に貞養の衾を罷て濳揚の睦を空しからず只濵路のを命しだ赤縄
足に繋ぐといへども合巹いまだ整はず身は悪棍に傷殺せられて冥府に執
るに由なし誰かこれを憐ざらんかるものに別に一個の濵路ありて更に信乃と匹配せ便
是二女一体寃鬼陽人異なれども前身後身一般の如しこの処作者一段の工緻ありて
初より意中に包蔵も肯官後語をあらはさず只かるところをのみ推て評するもありと
覚えたり細工は流々落成をみよといふ鄙語に似るものよろづのうへにヨメたるべし
怪いではかくはしきるあり予が著したる草紙物語のかつて二三十年に及ぶもの
剞板若干亡失て全からざる故をもて久しく刷出さざるありさる板どもをあながち索て補

涌泉堂蔵

剞劂するの事は校訂をこゝろゝ。恣に有像を易文を行脱して再刷せと性えう所云括頭巾縮緬帛衣化競刀三鐘この他あるべ。これらはコヽが名号ありとゝども補則は予が校訂を経ゝ。他人のなせ成るものゝ。コヽが金作とゝゝ。古板の戯編と物ゝ。いの大人氣なるに似くれど名を售るゝ。腌臜さゝ此ところを識しのゝ。

○本輯七巻楮数七ヨヌかり。あくをゝ。彫刻先成る所の四巻を疊て上帙とゝく發販せ下帙三巻も程遠からゝ。推つきく出さんとゝふ書肆の好ゝに任ー。ゝう山前山後花一時に開ゝ。看官異日のゝゝめを俟ゝ。猶春深く繙きゝ。

○曲亭翁著編里見八犬傳第七輯画者筆工刻人目次

有像　巻一二三四　溪齋英泉画

巻五六七　柳川重信画

浄書　巻三　谷金川

巻一二四　筑波仙橘